えくび通信

令和七年九月号（第八十七号）

恵久美を元気にする会
090-3184-4467

カラー版はこちら←

全国高校総体2025［東温高校男子ソフトボール］

池内輝君（泉屋）準優勝に貢献

2025年全国高校総体が8月1日～5日まで岡山県を中心にして開催され、愛媛県立東温高等学校は、男子ソフトボールで2016年以来の準優勝を果たしました。東温高校3年生の池内輝（ひかる）君は、4番キャッチャーとして全試合に出場。攻守に亘ってチームの勝利に貢献しました。1回戦では、優勝候補の飛龍高校（静岡県）と対戦し、1×0、一打同点の緊迫した最終回、ランナーを好送球で2塁への盗塁を阻止。流れを引き寄せる大きなプレーで成長した姿を強く印象づけました。「チームの結束力がとてもよく、練習通り、いつも通りの試合ができたと思います。特に3回戦、興国高校（大阪府）戦が象徴的でした。1×5と圧倒的不利な状況で迎えた最終回、全員が諦めず繋ぎ、延長タイブレークで逆転勝利できた。みんなで勝ち取ったあの試合が今回の準優勝に繋がったと思います。今の仲間と一緒にこの舞台で戦えたことがいちばん嬉しい」と振り返ります。

ソフトボールを始めたのは小学2年生、兄と一緒に近所でキャッチボールをしたのがきっかけでした。岡田中学3年生の時には、愛媛ジュニアの一員として出場した第22回全日本中学生大会で初出場初優勝するという快挙も経験。「ソフトボールを通じて学んだのは、目標をもって努力すること。小学生の時は、ホームランバッターになること、中学生からは全国優勝が目標でした。今回、優勝はできなかったけど、自分の中では目標達成したと、自分を褒めたい」と語ります。

中学生時代は、腰椎分離症に悩み、全国大会前に打撃不調に陥ったこともありましたが、幼馴染の支えで乗り越えられ、大会では準決勝、決勝と本塁打を放つ活躍を見せました。「仲間の存在があったからこそ、ここまで続けてこられた。本当に感謝しています」と感謝の気持ちも忘れません。

母・利枝さんは、「子供たちが、ソフトボールを続けて、こんなにも楽しませてくれると思ってなかった。兄弟妹でソフトボール通じて、多くの人と出会い、たくさんの感動をもらった。ここまで続けられたのは支えのおかげ。当たり前と思わず、感謝の気持ちを大切にしてほしい」と話します。

この夏の経験は、池内君にとって大きな財産となることでしょう。これからの成長と活躍を、地域の皆さんと一緒に見守っていきたいですね。

（山本正司）

全国大会で挑んだ夏 ― 心に刻まれた経験

大西兼豪君。得意のヘッドでゴール。

全国38都道府県から約630チーム、約11000人の選手が参加した国内最大級のジュニアサッカー大会の頂点を決める「アイリスオーヤマ第10回プレミアリーグチャンピオンシップ2025」が、7月30日～8月1日、宮城県女川町と石巻市で開催されました。

岡田小学校6年生の大西兼豪（けんご・向居）君は、FC今治のフィールドプレーヤーとして初めて全国の舞台に挑戦しました。兼豪君は「全国レベルのチームは攻守の切り替えが本当に速く、ボールを失った瞬間チーム全体で一斉にプレスをかけてくるのがすごい」と振り返ります。FC今治は予選リーグで2勝1敗と健闘し、リーグ2位という好成績。しかし、7月30日に発生したカムチャッカ半島地震による津波警報の影響で大会日程が変更となり、決勝トーナメントへ進めるのは各リーグ1位のみ。惜しくも決勝進出は逃しました。

それでも兼豪君は、会津サ

ントス（福島県）との試合でコーナーキックからのボールをゴール左隅へ決め、全国大会で記念すべき初ゴールを達成。「攻め込まれていて決めないと苦しい場面だったので気合いで押し込みました。毎日、お父さん（大西秀定さん）と恵久美グラウンドで練習してきた成果が出たのかもしれません」と笑顔で話してくれました。このゴールは大きな自信となり、練習への意識も変わったそうです。

小学4年生の時、腰椎分離症になり、約3ヶ月間サッカーから離れた試練を経験したそうです。毎日、動画でサッカーを研究し、「サッカーをする」だけでなく、「サッカーを考える」となった貴重な時間が、今大会のゴールに繋がったかもしれませんね。

さらに今回の大会では、東日本大震災の教訓を学ぶ震災学習プログラムも実施されました。兼豪君も参加し、被災して倒壊した交番を目の当たりにし、津波の恐ろしさを強く感じたといいます。体験談の中では、息子さんを亡くされたご両親が涙ながらに語る姿もあり、「無茶苦茶怖くて人生で初めての衝撃を受けた。お話を聞いていると、その人たちのことを思って胸が苦しくてたまらなかった」と静かに話してくれました。

「もっと上手くなりたい」。兼豪君は12月に行われるJFA全日本U-12サッカー選手権大会出場を目標に、日々練習に励んでいます。「毎週、今治まで送迎してくれる家族には本当に感謝しています」と語る姿からは、サッカーへの情熱とともに、この大会で人としての大きな成長を感じることができました。

（山本正司）

お神輿かついで防災だ

小林防災士の防災情報

秋祭りがもう来月にきましたね。ありがたくも防災の記事を読んで下さる皆さんにお願いがあります。秋祭りに積極的に参加しましょう。お神輿を担げる人は可能ならお休みを取ってでも参加して欲しいです。

これは単に祭り好きの発言ではなくこの恵久美の皆さんが災害が起きた時に被害を減らす防災的な側面からのお願いです。

災害時に「自助」「共助」「公助」この3つがそれぞれに効果的に働き連携することで被害を減らす事が出来ます。ご存じのとおり公助だけでは確実に足りていません。

南海トラフ地震の全割れと言われる最悪な地震に発展した場合、太平洋ベルトが破壊され日本の工業生産の三分の二が寸断。経済は壊滅的になり、日本の半分の人が被災者になります。我々一人ひとりが受けられる公助は絶望的に少ない枠しかありません。なので、そこから這い上がるためにも「自助」「共助」を今から蓄積して欲しいんです。

「共助」とは地域コミュニティによる助け合いです。お祭りはそのコミュニティを形成するとても良い機会です。

お祭りに出て隣三軒よりもっと広い、恵久美というご近所の知り合いが増えれば、被災直後の救援の助け合いの時も被災後の避難生活を送る時にもきっと役に立ちます。知らない人に囲まれた避難所では盗難や暴力などいつ起こるかとあなたにも、お子様にも緊張が続きますが、知っている人同士なら、あの人は看護師さんだ、あの人は人をまとめるのが上手だと、頼りになる人も見つけやすいですし、逆に気難しい人だと普段から知っていれば対応に困ることも減ります。祭りの場では皆さんがそれぞれの特性を活かして祭に関わる場面も多く。人を知るとても良い場になります。そして街としての団結力も育ちます。

今まで大きな災害にあった地域の住民はひどく落ち込み新しい生活を再建する力を失っている方多くいらっしゃいました。そこで住民達の心を癒し、勇気と活力を取り戻したのも「祭」でした。消極的な声もあるなか、能登では他県のボランティアの力を借りながらも復活させた祭は、住民の再起に大きな力となりました。

恵久美の祭を途絶えさせない、そしてみんなで協力して楽しむ事が地域防災力をあげる大きな力になります。ぜひ皆さんのお力を貸して下さい。そして楽しみましょうぞ。

恵久美防災士　小林裕介